

スローフード（その3）

スローフード運動は「イタリア食文化協会」という民間団体が運動の母体となって始まりました。彼らはマクドナルドを代表とするファストフードの世界的進出に反対し、地域の食と文化を中心にした新しい地域経済システムの立ち上げを目指したのです。マクドナルドを許してしまえば、輸入食材が大量に使われることから食材を作る地域の農家、加工職人、商店がなくなってしまう。人工的な味と香りで、均一的な味を押し付けることは、それぞれの地域が固有で持っている多様な食と味覚、地元にある野菜や家畜やその他の食材を失ってしまうことになる、というわけです。

ところで、日本の食に関する事情はどうでしょうか。現在、私たちの食糧の60%は輸入に頼っています。しかも、私たちの食べ物の53%が加工品で、外食する割合は17%といわれています。つまり、その地域で獲れた身近な食材を使って、なおかつ手作りであるということ自体があり得なくなっています。しかも地方でさえ、その地域でのむかしながらの食べ物が手に入りにくい。値がはればみんな東京などの首都圏へ出荷されます。物価の優等生といわれている鶏卵においても、採卵用鶏は昔のものとはまったく種類が異なっていて、すべてが改良されたもので、しかも鶏の餌の73%は海外からの輸入だそうです。

わが国が食物に関する施策に乗り出した背景には、現在の脆弱な食料の供給基盤、食の安全性の確保などに加えて、食生活の激変による、いわゆる生活習慣病の増加がありました。そのきっかけは1977年にマクガバン上院議員が提出した「マクガバン報告」だといわれています。アメリカで突然死が急増。その理由は「高脂肪・高カロリー、精製された穀物が中心の、野菜が極めて少ない食事」が原因で心臓病、糖尿病、がんが増加したためです。そしてそれが、膨大な医療費増に繋がっているというのです。これをうけて1992年には油脂類、甘いもの、肉類や牛乳などを控え、穀類や野菜を多くという「フード・ガイド・ピラミッド」が出されました。このピラミッド、頂上に脂や甘いものがあり裾野には米などの穀類がある。よく見ると日本人の昭和30年代の食生活習慣そのままなのです。

アメリカでは成人の65%が体重過剰で30%が肥満だそうです。この肥満化の傾向とファストフードの興隆が軌を一にしているとの指摘があります。2002年に肥満症に悩むアメリカの少女二人が「太ったのはハンバーガーのせい」と、ファストフード企業を訴えました。それを聞いた映画監督のモーガン・スパーロックが思いついたのは・・・。ファストフードを食べ続けたら本当に太るのか？ 人体への影響は？ 監督自らが実験台となり、ファストフードがいかなる影響を及ぼすのかを検証してみたのです。彼はそこで、「日本はアメリカ式ファストフード食が、健康的な伝統的食習慣を最も激しく破壊した国のひとつ」と指摘しています。ファストフードを30日間食べ続けたときの体の変化を記録したドキュメンタリー映画「スーパーサイズ・ミー」を是非とも観てください。

アメリカの日本に対する「年次改革要望書」の中にあっただろうかは知りませんが、アメリカの畜産・農産物輸出量を増やすためには、ファストフード産業の進出は規制しない。その結果、多くの若者は瞬く間に糖尿病、高血圧、脳卒中、心臓病の予備軍となっていく。でも食事は個人の生活習慣だ、だから病気になるのも個人の責任だ、と言われるのでは太ったものではありません。